## ボ　ケ・・・

木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲った事がない。そんなら真直かと云うと、決して真直でもない。ただ真直な短い枝に、真直な短い枝が、ある角度で衝突して、斜に構えつつ全体が出来上っている。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔らかい葉さえちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟ったものであろう。世間には拙（せつ）を守ると云う人がある。この人が来世に生れ変るときっと木瓜になる。余も木瓜になりたい。

（夏目漱石「草枕」より）

団地の入り口で、春の訪れを華やかに告げてくれる花がボケです。生垣、庭木、盆栽などで艶やかな花姿を見せるボケは、平安時代に中国から渡来したと言われています。中国ではボケの実を脚気、神経痛、腎臓病などの薬として利用しており、日本でも最初は薬用植物として伝えられたものと考えられます。

その実は７～８ｃｍと小ぶりながら瓜に似ており、木になる瓜で「木瓜（もっけ）」と呼ばれたものが「ボケ」に転訛したとも、「木瓜（ぼっくわ）」から「ボケ」に転訛したとも言われています。いずれにしても、その花よりも実を重用した証でしょう。

とりわけ、信州ではその果実を「地梨」と呼び塩漬けや焼酎漬けにして食べるそうですから、懐かしく思われる方もいらっしゃることでしょう。

ボケが園芸植物として栽培されるようになったのは、渡来後、実に約７００年後の江戸時代になってからです。日本には原産のボケにクサボケがあります。このクサボケと渡来した中国原産のボケを交配して新品種が作出され、盆栽や庭木として珍重されました。

江戸時代中期には、スウェーデンの植物コレクターのツンベルグが箱根山でクサボケを採集し、１７９６年に日本のボケとして初めて西洋に紹介しました。

学名の“Chaenomeles Speciosa”とは、「Chaenomeles（カエノメレス）」はギリシャ語の「chaino（開ける）＋ melon（リンゴ）」、「Speciosa（スペシオーサ:華やかな）」が語源で、「華やか

に裂けたリンゴ」の意味です。丸っこい花びらが開いたときの姿は美しく、リンゴの形を想像できなくもありません。

　ただ、「ボケ」の韻がどうしても「痴呆」に通じ、少々気の毒に思うのは私だけでしょうか。

　でも、「ぼける」も「ほれる」も同じく「惚」の字を書きます。それに、岡山弁で「ボッケ〜」は「とても」の意味で、広島出身の私にはボッケ〜親しみのある言葉です。「ぼっけぇきょうてぇ(とても怖い)」というホラー小説もありましたっけ。それから、ヘブライ語で「ボケ〜ル」は朝のこと。「人生の朝」と読み替えるといささか教訓的です。

　何のフォローにもなっていないかな？